

共同開発の現場から

レポート：高瀬徹朗（放送アナリスト／本誌特別記者）

第9回 (株)トラフィック・シム

汎用性と柔軟性を両立「AlertMagic」 「TORUBE Lite & マルチシンクロビューア」

エリア事情の異なる全国各地でサービスを行う放送において、各社が求めるシステムには共通する部分とそうでない部分がある。システムを提供する側は個別のカスタマイズを行うことができればベターだが、すべて特注ではコストメリットが生まれない。汎用と特注—その中間にあるのが共同開発だ。(株)トラフィック・シムが「Inter BEE 2011」でも紹介したTSおよびRF監視装置「AlertMagic」(アラートマジック)は、事情の異なる放送局の意見をそれぞれ採り入れつつ、汎用機として通用する機能へと見事にまとめあげている。

魔法のような監視システム「AlertMagic」

— 「AlertMagic」とは。

(株)トラフィック・シム ソフトウェア開発部 吉川尚氏 地デジ・BSマスター向けTS監視システムです。開発にあたってはテレビ東京様および札幌テレビ放送様から多くのご意見をいただき、最終的に両局のニーズに即した形としてご提供しました。

— キー局のテレビ東京、準キークラスとはいえローカル局の札幌テレビ放送ではかなり事情が異なる。

吉川 お話をいただいたのが同時だったのは偶然です。ご指摘のとおり、両局の求める内容には大なり小なりの違いがあります。最終的には両者の話を統合する形で製品の基本部分を構成し、個別に求められる部分をオプションでカバーする形としました。

— 具体的なニーズの違いとは。

吉川 「AlertMagic T&S」の基本機能はTS監視ですが、テレビ東京様は「放送障害につながらないものでも違反項目につながるものはすべて詳細なデータが欲しい」という点を重視されました。一方、道内という広いエリアカバーと多くの大規模送信所を抱える札幌テレビ様は「多拠点で監視できる機能を重視した構成にして欲しい」と仰っていました。

— そうした異なるニーズに多彩なオプションで対応したと。

吉川 両者に共通した部分を基幹システムとして用意しつつ、オプションによって幅を広げた形です。多拠点監視版では「AlertMagic T&S」の機能をそのままに全体ビューモードや全拠点アラートマップなどを追加、把握のしやすさや操作性をそのままにご利用いただける形となっています。

— シリーズ製品としてRF監視も用意された。

吉川 「AlertMagic」とRF監視ユニット「RM-1」を組み合わせることで、多拠点を階層的に監視できるRF監視システムとして運用することを可能としました。基本としているアルゴリズムは同様です。

— 製品名の「Magic」とは。

吉川 魔法のようなシステムで状態管理から履歴管理も含めた統合的な監視が可能になる、という意味を込めてつけた名称です。あらゆるニーズに魔法のように対応できる、というイメージでご紹介させていただいています。

— その魔法をかけるために苦労した点は。

吉川 放送局ごとにさまざまなニーズはありますが、そのお客様だけのために開発するというわけにはなかなかいかない。本体の安定性を確保しつつ柔軟性を持たせ、またレスポンスやユーザインターフェイスなどをいかに求められるレベルまで引き上げるか。そうしたバランスを取るのに苦労しました。

— レスポンスやUIでも現場の意見を採り入れている。

吉川 開発時にはお客様自身がUIをカスタマイズしたような形ですね。実際、購入した製品をご利用いただいた場合でもそうした細かいニーズは我々のもとにまで届きませんから、そうした情報を仕入れることができたことも今回の開発協力における大きなメリットとなりました。



「AlertMagic」TS監視画面例
各局の仕様に基づきカスタマイズされている



「AlertMagic」本体ユニット (Inter BEE 2011展示より)

新たな同録システムの提案

— 「Inter BEE」ブースではもうひとつ、TBSとの共同開発製品も紹介されている。

(株)トラフィック・シム ハードウェア開発部 小川裕輝氏 多種多点同録ユニット「TORUBE Lite」とマルチシンクロビューアを組み合わせた、これまでにない同録・マルチビューアのシステムです。これにより、自由度の高い障害解析システムを構築することが可能となります。

— 「TORUBE Lite」とは。

小川 ISDB-TからNTSC、HDMI、SD/HD-SDIなど7種類の多彩な入力に対応しつつ持ち運び可能な3Uハーフサイズの同録ユニットです。開発協力のきっかけも「なんでも録れて持ち運びできる箱が欲しい」というTBS様のニーズからスタートしました。

— それら複数台の「TORUBE Lite」とマルチビューアを組み合わせる。

小川 監視したいポイントにそれぞれ「TORUBE Lite」を設置し、マルチシンクロビューアで一括表示して監視する、というのがトータル仕組みです。リアルタイム情報の表示はもちろんですが、収録・保存した情報を遡って確認したり早送りや問題の場面に到達したりといった自由度の高い解析が可能となります。

— タイミング的にはリアルタイム監視している裏で同録を進めている形式になる。

小川 そう感じていただけるように間を詰めている点が開発の大きな苦労点です。実際には、同録してからマルチビューアに送っている形。つまり監視している時点ではわずかなデレイが発生してしまいます。それをいかに小さくするか、は製品開発における大きなポイントとなりました。

— SDI信号にも対応しているが。

小川 SDI収録にはこれまで対応したことがなかったので、まずはどうすれば録画できるのか、というところからスタートしました。これも開発上の大きな苦労点であると同時に、現在では製品としての特長になっている部分かと思えます。

— そこはTBSも強く要望した部分と。

小川 そうですね。またSDIのアンシラリー領域表示についても、汎用的な並びではなく自社で利用する際にわかりやすい並びにしてほしい、と要望を受けました。そこで画面レイアウトツールを用意し、それによってユーザ個々に画面をカスタマイズできる機能を搭載しています。

— 「AlertMagic」同様、ここでも柔軟性の高い汎用製品を実現していると。

小川 汎用性を持たせることは開発側にとって重要な



「TORUBE Lite」マルチビューア画面(左)と本体 (Inter BEE 2011展示より)

テーマ。加えてお客様ごとのニーズに柔軟対応することで優れた製品として評価いただけるようになっていくものだと考えています。

新領域挑戦へのきっかけにも

— 共同開発のメリットについて。

小川 ニーズを直に受けて、詳細なところまで満足度ができる。従来のお客様・販売元という関係性とは異なる、遠慮ない距離でお話をうかがえるという点で大きなメリットがあると感じています。

吉川 作る側の視点と使う側の視点、これは多少すれ違う面もあります。その微調整を直接話し合いながら行えるというのは開発側にとって有意義ですね。

小川 会社として新たな取り組みに踏み出すきっかけになったというのがあります。先ほどもお話ししたSDIの収録は今回が初めての取り組み。そこに参入していくことができ、また参入にあたって現場の意見を聞きながら取り組めたというの大きい。実際、SDI同録機能についてはこれまでに多くの反響をいただきました。

— 最後に放送局技術者へのメッセージなど。

吉川 今回ご紹介した製品についてご興味をいただければすぐにデモに飛んでいきます。また新たな製品開発についても、トラフィック・シムで対応できる内容であればすぐに検討いたします。

小川 当社はもともと、受託開発からスタートした企業。フットワークの軽さを第一に、気軽に声をかけていただけると幸いです。



(株)トラフィック・シム
ソフトウェア開発部
吉川尚氏



(株)トラフィック・シム
ハードウェア開発部
小川裕輝氏